

# 第10回「日本語大賞」

テーマ「忘れられない言葉」

高校生の部 優秀賞 受賞作品

「そらはつながっている」

イギリス

ダービー日本人補習校

高等部1年 青木 宙

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「そらはつながっている」

ダービー日本人補習校 高等部一年  
青木 宙（あおき・そら）

父からイギリスへ引越すという話を聞いたのは、中学一年の秋だった。日本からは飛行機で約一二時間もかかるという場所に、しかも海外へ移住するという事実にはとても驚いたが、今まで日本でも一度も引越したことがなかった私は、とても楽しみだった。けれども、日本語が通じない暮らしへの不安や、新しい友達に出会えるか等、様々な疑問に押しつぶされそうだった。

慌ただしかった冬も過ぎ、春の兆しを感じさせるような日本の学校の最終日、中学校のクラスのみんながお別れパーティーを開いてくれた。たくさんもらったプレゼントの中に一冊のアルバムが入っていた。開いてみると、それは友達や先生方からの手紙だった。その中に、国語の先生からの言葉が刻まれていた。

「そらはつながっている」

友達や他の先生方からは漠然と「頑張れ」といった内容の応援メッセージを頂いたが、「頑張れ」とだけ言われても、自分一人の力だけで頑張れるかどうか分らないし、少し不安な気持ちになった。そんな時、この先生からのメッセージはひときわ輝いて見えた。

「そらはつながっている」

なぜだろう、遠く離れてしまうのに、日本からもみんなが見守ってくれるような安堵感が心に深く沁みこむ。そして、未知の世界へと足を踏み出す勇氣も湧いてきた。およそ九千キロメートルも離れてしまうけれど、壮大なそらは日本もイギリスも地球をも、すっぽりと包みこんでいる。どこから見上げて同じそらなのだ。だから、イギリスにいて日本にいる友達の存在を身近に感じることができる。イギリスと日本のそらがつながっていると改めて認識して、寂しさや離れたくないという気持ちが体からすつと抜けていった。そして、環境が変わることに對する不安や戸惑いも少なくなった。

渡英する前は、毎日のように学校やお稽古に行くという日常だった。それに加え、しばらく会えなくなるため、友達と頻繁に会っていたから、とても満足感のある忙しい日々を送っていた。もちろん、何も考えることがなく、自然と日本語で会話することもできていた。しかし、海外に移住するということは想像以上に虚無感や孤独感を伴った。イギリスに来た当初は、転入する学校が長い間決まらなかったため、暇を持て余し、何もすることができないでいた。ようやくイギリスの学校が決まり、新しい日々が始まったものの、友達を作ろうにも英語でコミュニケーションをとらなければならず、いちいち何かを言うのにも考える時間が必要で、周りとの高い壁を感じざるを得なかった。

そんな時にはいつもそらを見上げる。ここのそらと日本のそらがつながっていることを再認識するために。そうすることで、自分の中にある虚無感や孤独感がちっぽけに思えてくる。どこにいても見守ってくれる星たち、もちろん、太陽や雲だつて励ましてくれる。すると不思議なもので、学校でも笑顔で過ごす時間が増え、前向きな気持ちに切り替わっていった。周りにも次第に馴染み、晴れやかな気分で学校に通うことができるようになった。学校の友達や先生方の力を借りながら、一歩ずつ、日本語が使えない不慣れた環境に順応していくことができた。しばらくして、クラスの友達の家に遊びに行ったことがきっかけになり、仲の

いい友達もでき始めた。一緒に映画を見たり、買い物をしたりと、日本にいた頃のようなイギリスでの日常が始まった。

一時には暗く、しとしと降り続く雨も、鮮やかな虹と共に消えていく。毎日、同じ時間に見上げて、それが見せる表情はいつも違う。過ぎ行く雲を追いかけていくと、いつか日本にたどり着くような気持ちになる。夜空に散りばめられた星たちの、やわらかな光にかぶさるように、日本にいる友達の顔が頭に浮かんでくる。自分の中の暗闇を照らしてくれる、そんなたくさんの笑顔に励まされ、私は再び歩き始めることができるのだ。